

「敬老の日」に因んで

今年の「敬老の日」は9月19日(月)で、世の中は17日(土)、18日(日)、19日(月)の3連休になっているが、職に就いていない私には特別なことはない。普通の意味では、私も既に敬老の対象かもしれないが、自分としてはその実感はほとんどない。ただし、60歳代まではあったエネルギーというか、何かをする気力、集中力、体力が減っていることは感じている。そのなかで、下記の歌には深い共感を覚える。

「はてしなき学びの林わけかねてさまよふまにも身は老いにけり」

この歌は、私にとっては大先輩であり、先生の先生にあたる柴田雄次先生が詠まれたものだ。柴田雄次先生は東京帝国大学理学部化学科教授を昭和17年(1942年)に退職された後、新設の名古屋帝国大学の理学部長に就任され、戦中・戦後を名古屋で過ごされた。上記の歌は、名古屋帝国大学を昭和23年(1948年)に退職された66歳のときのものだ。柴田先生は昭和55年(1980年)98歳で亡くなられた。私は当時東大化学教室主任(現在の専攻長)だった関係で、青山葬儀所で行われたお葬式のお世話をした。先生は、教育・研究における実績、見識、人格のいずれにおいても優れた、良い意味での帝国大学教授だった。

敬老の日を国の祝日にしたのは日本らしいことだと思う。アメリカでは、まず考えられないことだ。ヨーロッパ諸国にも、こういう祝日はないはずだ。しかし、日本で

も、敬老という言葉は今では実際には死語になりつつあるのではないか。これは当然の成行きだと思う。なにしろ、百歳以上の人が全国に4万人以上いるという長寿社会が実現しているなかで、長寿の希少価値は激減している。70歳は古稀つまり古来稀(こらいまれ)と言われてきたが、これが実感をもって受け止められていたのは、昭和30年代までではなかろうか。今では、70歳は平均寿命よりもずっと若い年齢だ。

今後、人間の寿命はどこまで伸びるのだろうか。医学の進歩によって、少し前までは命を失っていたはずの病気が治るようになり(完治とまでは行かなくても延命はできるようになり)、人間はなかなか死ななくなった。問題は、それで幸せになったかどうかだ。健康で長寿ならばまずはよいが、明らかに健康ではない状態で長生きすることは、本人にとって幸せかどうかかわからないと思う。これについては、人々の意見は分かれるだろう。

尊厳死協会というものがある。人間の尊厳を保つことができない状態での延命を拒否する人たちの集まりで、この意思を元気な間に書面で表明しておき、それを誰かが医師に渡そうという運動だ。医師がそれを尊重することを前提としているが、それには法律的なバックアップはないようだ。この点は、今後は是非法律的に認められるべきだと思う。そうでないと、医師を難しい立場に立たせることになる。

今後、遺伝子に関する研究が進むと、更に寿命は延びる可能性が高い。寿命に関係する遺伝子があることもわかっているらしいが、人間の遺伝子を直接操作するような研究は各国で禁止されているはずだ。しかし、間接的な方法で、寿命に関係する遺伝子の働きを強めるということができるかもしれない。

国民全体が高齢化するということは、一種の社会革命が起こっていることだと認識しなければならない。比較的短い時間で、世の中をガラリと変える政治革命とは異なり、高齢化はかなりの長期にわたって進行する社会革命なのだ。しかも、これは人類が経験したことのない革命なのだ。

長寿社会が進んでいくなかで、社会の仕組みを変えていかなければならないと思う。国の財政状況がどんどん悪化していくなかで、医療費のかかる年寄りが増え続けることは、保険負担、年金負担の増大を招き、国を自滅に追いやることになる。仕事をしていれば、健康を維持しやすいことは間違いないので、65歳以後でも仕事をする意思のある人たちが、何らかの形で就業できるような仕組みを作るべきだ。

そのようなシステムができれば、シニアな個人はいくらかでも幸せになり、国の厚生関係支出の増加を抑えることができ、GDPも増える可能性があるのではないか。私はGDPの算出方法をよく知らないが、年金生活はGDPに貢献しないのではないか。これは個人として気持のよいことではない。

昨日、テレビのニュースで、77歳の日本人男性がヨットで単独世界一周に成功したことを見た。3年間かかっており、単独世界一周の年齢記録を更新したものだ。年を取っても大変なことができることを実証したわけで、年寄りは老人ホームに入るものという世の中の意識を変えるきっかけになればよいと思う。（おわり）